

日本がん分子疫学研究会 ニュースレター

2009 年 3 月
Vol.9, No.2

事務局：〒466-8550
名古屋市昭和区鶴舞町 65
名古屋大学大学院医学系
研究科予防医学／医学推
計・判断学内
TEL:052-744-2132

第 10 回日本がん分子疫学研究会の開催にあたって

第 10 回日本がん分子疫学研究会会長 菊地 正悟

第 10 回日本がん分子疫学研究会につきましては、概要を含めた演題募集の連絡が、郵送で既にお手元に届いていると思います。

今回は、第 16 回日本がん予防学会（会長 白井智之 先生）、第 32 回日本がん疫学研究会（会長 田島和雄 先生）と合同で、「がん予防大会 2009 愛知」として、「予防の容易ながん困難ながん」を主題に

2009 年 6 月 16 日(火) ～ 17 日(水)に、名古屋市の愛知県がんセンターとメルパルク名古屋(16 日夕方)の懇親会)で開催いたします。

特別講演として、「自然に学びそして地球環境問題に取り組む」、招へい講演として、「ヘリコバクテリロ関連胃がんの予防(仮)」と、「なぜ日本人に肝がんが多いのかーその原因と予防」が予定されています。シンポジウムとしては、日本、韓国、中国、ベトナム、タイ、インドネシアの演者による国際シンポジウム「アジアのがんの特性と予防対策」や、合同シンポジウム「動物発がん予防:動物実験からヒトへの応用」が予定されています。

日本がん分子疫学研究会が中心となるシンポジウムとして、合同シンポジウム「遺伝子多型と家族性がん」があります。遺伝子多型、家族性がんに関する演題を 5 題前後ご発表いただいで討論する予定です。演者は未定で、応募演題から選ば

れることになります。日本がん分子疫学研究会の会員の皆様には、演題応募と、多数のご参加をお願い致します。

また、ご承知のように、日本がん疫学研究会との合併の話が進行しています。この問題について、16 日の昼食後の時間に行われる日本がん分子疫学研究会総会でも、最終決定には至らないと思いますが、議題に取り上げられることになると思います。今回の総会は、このように例年にも増して重要な内容がありますので、会員の皆様には是非ご出席下さいますようお願い致します。

6 月という梅雨の予想される時期ではありますが、会場周辺は整備が進んでおり、ご不便をおかけすることはないと確信しております。

「がん予防大会 2009 愛知」に、多数の日本がん分子疫学研究会会員の皆様のご参加をお願い致します。

CONTENTS

第 10 回日本がん分子疫学研究会の開催にあたって

菊地正悟 . . . 1

第 19 回日本疫学会学術総会に参加して：日本疫学会の中のがん分子疫学研究

岩崎 基 . . . 2

日本がん疫学研究会との合併：その経緯

浜島信之 . . . 3

編集後記 . . . 4

第 19 回日本疫学会学術総会に参加して：日本疫学会の中のがん分子疫学研究

国立がんセンターがん予防健診研究センター予防研究部 岩崎 基

2009 年 1 月 23、24 日に金沢市文化ホールで開催された第 19 回日本疫学会学術総会に参加した。「疫学研究から健康施策へ」をテーマに特別講演やシンポジウムが企画され、一般演題 216 題（口演 35 題、示説 181 題）の発表があった。今回はこれらの演題から、がんの分子疫学研究に焦点を絞って報告する。

私が見た範囲では、一般演題のうち症例対照研究およびコホート研究のデザインを用いて、がんおよび前がん病変との関連を検討した発表は、口演 7 題、示説 13 題であった。さらにこの中でがん分子疫学研究、特に遺伝子情報とがんの関連を検討した発表は、口演 1 題、示説 5 題であった。この 6 演題の概要は以下の通りである。

Hoirun Nisa 先生（九州大学大学院医学研究院予防医学分野）は、人口ベースの症例対照研究において（685 症例）、喫煙、たばこ中の発がん物質の主な代謝酵素（CYP1A1、GSTM1、GSTT1、NQ01、EPHX1）の遺伝子多型と大腸がんリスクの関連、さらにそれらの組み合わせによる交互作用を検討した研究を口演発表した。結果はいずれの要因とも関連は観察されず、また遺伝子-環境交互作用も見られなかった。ただし GSTT1 と CYP1A1 の間に有意な遺伝子-遺伝子交互作用が見られたが、演者らは偶然

の結果と解釈していた。

示説発表では、尾瀬功先生（愛知県がんセンター研究所疫学・予防部）が、病院ベースの症例対照研究（食道がん 265 症例、頭頸部がん 366 症例）のデータを用いて、アルコール代謝酵素（ADH1B、ADH1C、ALDH2）の遺伝子多型、アルコール摂取、およびその組み合わせによる影響を食道がんと頭頸部がんにおいて検討し、それらの影響が食道がんにおいてより顕著であることを報告した。

安藤亮介先生（名古屋市立大学大学院公衆衛生学分野）は、前立腺生検を受けた患者のうち病理検査によりがんと診断された 110 人を症例、それ以外の 214 人の患者を対照群とし、調査票から推定した脂肪摂取、PPAR- γ 遺伝子多型（Pro12Ala、C161T）と前立腺がんの関連、およびそれらの組み合わせによる交互作用を検討した。その結果、脂肪摂取と Pro12Ala 多型は前立腺がんとの間に関連は観察されず、C161T 多型のうち T アレル保有者での有意なリスク低下が見られた。さらに脂肪摂取と C161T 多型を組み合わせた解析で、低摂取かつ T アレルを持つ群において有意なリスク低下が見られたが、交互作用は有意でなかったことを報告した。

富田耕太郎先生（名古屋大学大学院予防医学/医学推計・判断学）

は、病院ベースの症例対照研究（583 症例）のデータを用いて FGFR2 遺伝子多型（rs2981582）と胃がんリスクの関連を検討した。その結果、胃がん全体および組織型別に見ても関連は観察されなかったこと、同時に対照群の中で胃粘膜萎縮と多型の関連も検討したが関連は見られなかったことを報告した。

菱田朝陽先生（名古屋大学大学院予防医学/医学推計・判断学）は、同じく病院ベースの症例対照研究（583 症例）のデータを用いて、TLR4 遺伝子多型（+3725 G/C）と胃がんリスクの関連を検討したが、関連は観察されなかった。しかし対照群の中で胃粘膜萎縮との関連を見たところ、C アレルをもつ群で重度の萎縮と有意な関連が見られたことを報告した。

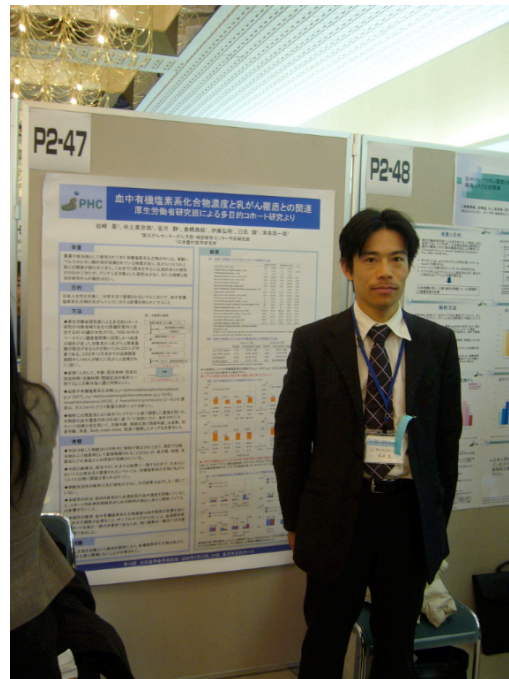
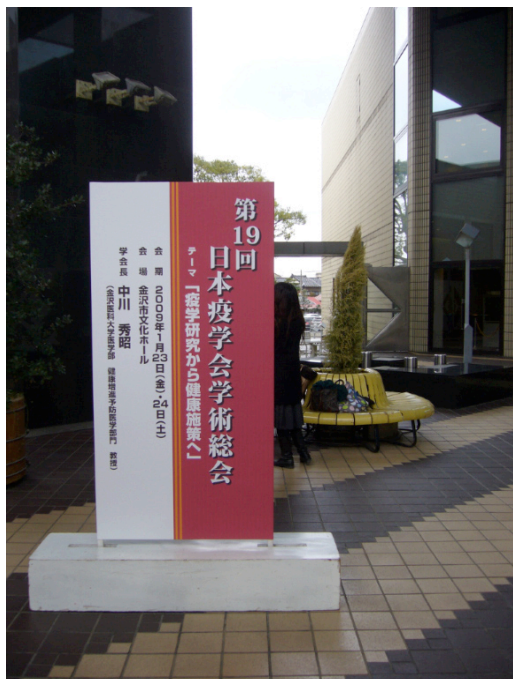
松尾恵太郎先生（愛知県がんセンター研究所 疫学・予防部）は、大規模な全ゲノム解析において同定された染色体 8 番の 8q24 領域の連鎖不平衡にある 2 つの遺伝子多型（rs6983267、rs10090154）と大腸がんリスクとの関連を、病院ベースの症例対照研究（481 症例）により検討した。その結果、日本人集団において rs10090154 とは関連が見られないが、rs6983267 では先行研究に一致して有意な関連が再現されたことを報告した。

演題数は多いとは言えないが、

その傾向をまとめると喫煙や飲酒などの環境要因と機能が比較적으로知られている遺伝子多型との交互作用を検討した研究と、全ゲノム解析などから報告された遺伝子多型を日本人集団で再現する、あるいは他の部位で検討した研究に大別できる。交互作用を検討には

多くのサンプル数が必要で、どうしても一つの研究では限界がある。そこで一つの研究の中では case-only study のデザインを適応して交互作用を検討するなどの工夫が必要であり、さらには複数の研究データをプールした解析などを計画する必要があると感じた。

また全ゲノム解析などで報告された結果を日本人集団で再現するためにはスピードが要求されるため、それに対応するためのインフラを普段から整備しておく必要があると感じた。



日本がん疫学研究会との合併：その経緯

日本がん分子疫学研究会会長 浜島 信之

日本がん分子疫学研究会は1999年に北川知行先生を初代会長として発足いたしました。創刊号のニュースレターに掲載された平成11年10月1日時点での会員数は114人で、この分野に関心を持つ広い分野の研究者が参加しています。第1回の研究会は2000年5月15日に東京大学山上会館で盛大に開催されました。当時、疫学研究者の中

には生体指標を用いた研究を得意とするものがあまり多くなく、一方では、多数の人を対象として生体现象を研究することにわが国でも関心が集まり始めた頃でした。

その後、会長は中地敬先生、湯浅保仁先生、浜島へと引き継がれ、昨年までに9回の研究会が開催され、会員も154人と増加しました。この間に、多人数を対象とした生

体指標の研究が多く行われ、がん疫学研究の主要な研究分野の1つとして定着致しました。疫学研究は記述疫学、分析疫学、介入研究に区分されますが、いずれにおいても生体指標を用いることの重要性が認識され、これを取り入れた疫学研究が多く行われるようになりました。本研究会はわが国のがん疫学の発展に大きく貢献し、十

分な役割を果たしたと言えます。

中地敬先生が主催されました平成 18 年の第 7 回研究会から、研究会としての性格を同じくする日本がん疫学研究会と同時開催となり、翌年からは日本がん予防学会も加わり「がん予防大会」と発展しました。目的を同じくする研究者にとって、他分野の知識や技術が吸収でき、共同研究の機会を得ることができる合同研究発表会は魅力的です。このような活動の中から、会員の重複が多い日本がん疫学研究会との合併が話題となり、幹事会では平成 18 年に田島和雄先生か

ら合併についての提案がありました。この提案を受け、検討委員会（委員は湯浅会長、田島幹事、相村幹事）が設置され、更に両研究会において連携協議会が設置され（本研究会の委員：北川先生、中地先生、湯浅先生、相村先生、浜島、日本がん疫学研究会の委員：秋葉先生、菊地先生、田中先生、大島先生、田島先生）検討が行われています。

本研究会では、1 月 20 日を締切として、1) 合併の是非、2) 合併後の名称、3) 合併の時期についてアンケート調査を行い、20 名の会員

の方からご返事をいただきました。反対意見が 1 通ありましたが、それ以外の会員からは賛同の意見をいただいています。反対の理由は、疫学とは異なる分野の研究者が多く参加している本研究のよさが合併により失われてしまうのでないか心配されるということでした。これは大変重要な指摘であり、私もこれは合併を考える時に最も重要な点であると考えています。連携協議会では引き続きこの問題を検討し、日本がん疫学研究会の連携協議会と意見交換を行っていきたいと思っています。

編集後記

日本がん分子疫学研究会は、その創設より 10 年を経過し、今年は第 10 回の節目となる研究会が開催される予定です。周知のように、現在、日本がん疫学研究会との合併に関する検討が行われています。そこで、本号では、合併に向けてのトライアルともいえる日本がん予防学会をも含めた総会の合同開催「がん予防大会 2009 愛知」について、第 10 回研究会会長・菊池正悟先生による告知、合併に関する経緯についての本研究会会長・浜島信之先生による報告、そして、日本疫学会にみるがん分子疫学研究の発表について、国立がんセンター予防研究部の岩崎室長による報告の 3 編を掲載させて頂きました。

日本疫学会においては、がん疫学研究が 20 題（全演題の 9%）、がん分子疫学研究が 6 題（がん疫学研究演題の 30%）ということでした。がん分子疫学研究は、その名前から単純に考えると、がん疫学研究の内、分子を用いた研究ということになります。従って、がん分子疫学研究会は、その様なスペシフィックな部分に興味を抱く研究者が情報を共有するための場ということ、存在価値があるものと考えることが出来ます。一方で、10 年前では多くはありませんでしたが、近年では、アンケートや血清と共に、分子レベルの情報もがん疫学研究において、当たり前の様に使われている状況になってきています。従って、がん分子疫学研究もがん疫学研究なのだから一緒になった方が、限られた研究者人口においては、時間的にも、経済的にも効率が良いとも考えることが出来ます。

今後、更なる議論を経て、一定の結論が、遅くない時期に出ることを、個人的には願っています。

（津金昌一郎）